

当館所蔵の丹緑本・奈良絵本など

朝倉治彦
馬場萬夫

奈良絵本、丹緑本についての研究は、戦前から多少行なわれてきてはいる。しかし、本格化してきたのは、戦後のように見受けられる。当然、当館蔵本にも調査の手が及んでくるであろう。げんに、われわれは丹緑本研究家吉田小五郎氏より、インフォメーションを求められたことがあつた。何分にも当館の目録では、奈良絵本、丹緑本の註記は徹底してないから、館外からねらい打ちして閲覧することはむずかしい（『国書総目録』にも、この区別は全くされていない）。この種の研究は、実物調査が前提となるものであるから、まずは、当館所蔵本を紹介して、研究者への利便の道を講ずることとする。

当館所蔵の奈良絵本は、丹緑本刊行期を下る写しと見られるものであるため、丹緑本出現以前の奈良絵本、およびそれに先行した絵入写本の研究を目的とした場合は、残念ながら益するところ少ないであろう。

丹緑本、奈良絵本、その他いづれも、書名の五十音順に列記し、簡単な問題をふした。他館に丹緑本があつて、当館に同板ながら丹緑本でないもの（例えば『うをのうた合』『けた物の歌合』など）にまで及ぶとおもしろいのであるが、これは略した。奈良絵本のほかに、本文が室町の物語であるものなども加えて広く採りあげた。なお、岡田希雄旧蔵本中に、奈良絵本の写しが若干あるが、これは省いた。また△▽内は、当館請求記号である。

丹 緑 本

朝顔の露

本書は、この物語の刊本で最も古い寛永中刊本である

△京一 一九五▽

が、下巻を欠く上巻のみの端本である。

〔形態〕一冊 袋綴 たて二四・六cm よこ一七・四cm
〔表紙〕表紙は改装で、これは図書館で附した紺表紙である
〔題簽〕欠
〔内題〕第一丁第一行に「あさかほのつゆ」とある

〔匡郭〕なし。挿絵の面のみ四周単辺の匡郭がある。字面高二〇・五cm。挿絵の匡郭は、たて一九・四cm、よこ一三・九cm(第一図) 〔丁数〕二六丁。丁附は「一」至「廿六終」 〔行数〕一一行 〔字数〕一行約二〇字ないし二六字 〔柱刻〕上部に「あさかほ上」、下部に丁附

〔挿絵〕全部片面。四表・七表・一〇裏・一四表・一七表・一九表・二二表・二三表・二五裏 〔筆彩色〕丹緑黄の三色であるが、黄の使用は少ない。雲など横に筆を引いている 〔本文〕文字は、漢字の使用は少ない。振仮名多少あり。句読点、濁点なし。和歌は三字下げの二行書きである。挿絵の前に空白を残している。

〔印記〕巻頭に「不忍文庫」「阿波国文庫」の朱長方印が押されている

〔備考〕明治二年購求。ちなみに、室町後期の絵入写本が横山重氏にある

愛宕地蔵之物語

△か一六七▽

この室町時代物語の伝本は写本と板本とがあり、板本に

は、この承応二年西田板と寛文二年鱗形屋板の二種がある。

本館蔵承応板は、中・下巻に補写のある欠点を持っている。

〔形態〕上中下 三巻 合一冊 損傷あり 袋綴 たて二七・五cm よこ一八cm

〔表紙〕改装。青色地。さや形の空押の改装 〔題簽〕のちの題簽である 〔内題〕巻首に、本文より多少下げた「愛宕地蔵之物語 巻之上」とある。ただし、中・下巻では「巻中」「巻下」と「之」字はない 〔尾題〕ないが、下巻、本文末尾に「終」とある

〔匡郭〕たて二二・二cm、よこ一六cm。ただし、上巻の第一七丁から第二〇丁まで、ならびに中巻の九丁から一二丁までの各丁は、板心側の一边を欠いている 〔丁数〕上巻二〇丁 中巻三三丁 下巻一八丁 〔行数〕一面一一行 〔字数〕一行約一七字から二六字。文字の大きい頁と、小さい頁とがある 〔柱刻〕上部に柱題「あたこ」、少し離して「上」(中・下)と巻次を、さらに下部に丁附がある。下巻一七丁の丁附は「十四」と誤刻されている

〔挿絵〕大体中程のくびれたまゆ型の中に挿絵を入れてあるが、片面、見開きのほかに一丁の一部に枠を作った挿絵もある。上巻 六表・一〇裏一表・一三裏一四表・一六裏。一三裏の絵の上部に文章がある。一六裏の挿絵は左下にある。中巻 二表・五裏・八裏・一二裏・一九裏一〇表。一二裏も挿絵の上に文章がある。下巻 二裏三表・

六裏七表・一三裏一四表・一六裏 「筆彩色」丹緑黄の三色であつて、塗りつぶすという感じであり、直線的な筆の運びはない。「本文」振仮名、濁点が多く使用されている。挿絵の前頁には空白のある箇所もあり、また、挿絵と本文とが併刻されている頁もある。この本文と挿絵との状況は、当然絵巻物の存在を推定させるであらう。絵巻物の存在は聞かない

〔刊記〕下巻終丁表、本文末に「承応二年癸卯初冬吉辰日／開板 寺町二条下町本屋／西田加兵衛尉」と三行に記されている

〔備考〕補写は、上巻になく、中巻には、五裏・八裏・一二表・一二裏の四頁で、うち三頁は挿絵である。下巻は、二裏三表・一六表・一六裏・一八表の五頁分で、うち三頁分が挿絵のある箇所である

多ほしをり

本書は、幸若の詞章である。

〔形態〕袋綴 たて二〇・二cm よこ二七・三cm

〔表紙〕黒の元表紙なれど、左右下部は破損し全体に擦れている。裏表紙は比較的原形を残している。さや形に、何か模様の空押、判然としない。〔題簽〕わずか上巻に文字の部分も残っている。「多ほしをり 上」とよめる〔内題〕上巻第一丁第一行に、本文より三字下げて「多ほしおり

△か―五三▽

上、下巻第一丁第一行に、本文より三字下げて「多ほしおり下」とある

〔匡郭〕なし。挿絵のみが四周单边である。字面高二〇・三cm（上巻第一丁）。挿絵の匡郭は、たて一九・二cm、よこ二五・二cm（第一面）。「丁数」上巻三三丁（「上二」―「上二十三」）下巻二七丁（「下二」―「下二十七」。ただし二四丁裏欠）。「行数」一面一〇行。「字数」一行だいた二〇字。「柱刻」上部に「烏帽子折」、下部に「上」「下」のごとく丁附がある

〔挿絵〕全て片面で、上巻に六図、下巻に六図あるが、欠頁の箇所は挿絵であつたと推定される。「筆彩色」丹・緑・黄の三色を使用し、緑が比較的多い。筆の腹で長く引く方法が多く見られる。「本文」文字は、平仮名が断然多い。振仮名、句点、濁点あり。挿絵の前の頁は、本文の空白をこしらえてある

〔刊記〕下巻終丁裏に「寛永十二年乙亥二月吉日 開板之」とある

きふねの本地

△京―二八▽

丹緑本の色彩が見えるが、われわれの判断では後に施した彩色ではないかという疑いを持っている。その筆彩の手法が、いささか他と違うという点と、彩色とで、そう判断した。しかし、東洋文庫本、京大本は丹緑本であるので、

一応ここに解題をし、やがて後の比較を期したい。ちなみに、果園文庫本は丹緑の筆彩はない。

〔形態〕上中下 合一冊 袋綴 たて二五・四 cm よこ一七・四 cm

〔表紙〕改装、榊原芳野の施したものと推定する。榊原本に多く見られる空白表紙だからである。下巻終丁裏の隅に残っている紙片から、元表紙は、黒表紙であつたらう。

本書と同板の果園文庫本は、原装であるが、同一ではない〔題簽〕元題簽欠。後の題簽に「貴船本地 完」と記してある。〔内題〕上巻第一丁第一行に本文より四字下げて

「きぶねの本地 上」とある。中、下巻もこれと同断である。〔尾題〕なし

〔匡郭〕本文はノドの部分のみが匡郭なく、三辺単郭。

ただし、挿絵は四周単郭。たて二〇・九 cm、よこ一五・二 cm 〔丁数〕上巻一四丁（丁附は「上」）上十四終）中巻一六丁（中一）中十六終）下巻二〇丁（下二）下廿終）〔行数〕一〇行 〔字数〕一行約一六字一二〇字 〔柱刻〕上に「きぶね」と柱題、下に丁附

〔挿絵〕片面のもの三図、見開きのもの六図がある。上巻 三裏四表・八裏・一一裏一二表 中巻 一裏二表・四裏・一四裏一五表 下巻 八裏九表・一四裏・一八裏一九表 〔筆彩色〕丹と緑との二種を施している。後の施行であらうという推察は既に記した。〔本文〕文字は平仮名多

く、句点、濁点あり。ただし、濁点は非常に少い

〔刊記〕なし。承応明暦頃であらう。板本はこの板のみで、他の伝本は、写本、奈良絵本である。〔印記〕榊原の朱印のほかに「このぬし／せんくわ」の黒方印が見える。これは名古屋の学者高橋仙果の蔵印である

強盗鬼神

本書は、かつて『国立国会図書館月報』一三八号（昭和四七年九月号）に紹介した。用紙といい、丹緑の彩色といい、特製本であらう。

〔形態〕上下 合一冊 袋綴 たて二三・九 cm よこ一六 cm 〔本文用紙〕間似合紙

〔表紙〕改装、他の書の表紙を転用したものとと思われる。見返しに金砂子は原装のものであらう。〔題簽〕短冊題簽に「強盗鬼神全」と墨書、屋代弘賢の字か。〔内題・尾題〕なし

〔匡郭〕たて二八・二 cm よこ一一・八 cm 〔丁数〕上巻一七丁、丁附は「一」至「十七終」下巻も同様。〔行数〕一〇行 〔字数〕一行一八、九字 〔柱刻〕上部に「強盗上」強盗下、下部に丁附

〔挿絵〕上巻 二裏・四裏・七表・八裏・一一表・一二裏・一六表 下巻 三表・四裏・七表・八表・一一裏・一四裏・一六裏 〔筆彩色〕丹・緑・黄・紫に金箔を用いて

〈別〉

いる。雲は横に引いただけである。挿絵の前頁は、空白あり。「本文」漢字交り平仮名、振仮名を使用す。濁点あり、句読点なし

〔備考〕各巻巻首に「不忍文庫」「阿波国文庫」の二題、巻尾に「阿波国文庫」の一題あり。明治三二年二月購求

さるげんじ

△一八一—一七九▽

本書の室町時代物語の伝本は、寛永頃の多入整板本、寛文頃刊行の松会板（絵入）、元禄頃の西村屋板（絵入）、享保頃のお伽草子本と写本とが知られている。なお、お伽草子本は、その粗に寛永頃の多入横本が推定されていることを加えておく。当館の蔵本は、第一に提示した寛永頃の多入刊本である。

〔形態〕大本 一冊 少し虫食いあり 袋綴 たて二三・八cm よこ一一七・三cm

〔表紙〕栗皮色にして、当時のもののように見えるが、元表紙ではなく、もう少し大きい本の表紙を流用したものである。〔題簽〕なし。直接、表紙左に「丹緑本／猿源氏全」の朱墨書がある。〔内題〕巻頭に、本文より四字下げで「さるげんじ」とある

〔匡郭〕なし。挿絵の女四周単郭。たて一九・二cm、よこ一一・六cm（第一図）〔丁数〕三二丁〔行数〕一〇行〔字数〕一行の字数は、二〇字前後。ただし、一九丁裏と

二〇丁表は、文字小さく二四字前後である。この二面に収めねばならぬ事情が存したものと思われる。〔柱刻〕上部に「さる」、下部に丁附。丁附は「一」より「三十一」とある

〔挿絵〕片面で八図ある。二裏・四表・一五裏・一八裏・二二裏・二三裏・二九表。字面 たて二〇cm よこ一四・四cm 〔筆彩色〕丹と緑との二色でありごく簡単な彩色で、塗るといふものではなく、ちょっと点をうったり、筆を横に引いたという程度である

〔刊記〕なし

〔備考〕表紙右上に「言」と墨書せる紙片がはつてある。この紙片は時折見ることがある。大東急記念文庫蔵『おちくほのさうし』の表紙にもはつてある。本書と同板は、東洋文庫、岩瀬文庫などにあるが、京都大学蔵本は、丹緑本ではない

待賢門平氏合戦

△京一三三八▽

本書は六段の絵入古浄瑠璃正本である。

〔形態〕小本 上下 合一冊 袋綴 たて一八・六cm よこ一一・八cm

〔表紙〕渋の斜線刷毛目模様の改装。左上に直接「平氏合戦」と墨書、右上に「寛永二十年版」と朱の別筆で認めてある。〔題簽〕なし。〔内題〕第一丁第一行に「待賢

門平氏合戦」、また九丁目第一行にも、上と同様である。段目には「へいじかつせん」とある。

〔匡郭〕四周单边。たて一五・七cm、よこ一一cm（第一丁）〔丁数〕一六丁。丁附は「一」から「八」、また「一」から「八」〔行数〕一四行〔字数〕一行約二七字前後〔柱刻〕上下に魚屋があつて、上魚屋の下に「たいけん上」「たいけん下」と柱題があつて下魚屋の上に丁附がある

〔挿絵〕全部片面。二表・五表・七表・一〇表・一三表・一五表〔筆彩色〕丹と緑との二種で、筆の腹でチョイチョイと押えたという位のもので、横に引いた筆づかいは極めて少ない。絵は稚拙である〔本文〕漢字交り平仮名、句読点なし、濁点あり

〔刊記〕第一八丁の表、本文の末に、「寛永貳拾年卯月吉辰日 西洞院通表者町 さうしや九兵衛板」とある。一六丁の表の刊記もこれと同じ

〔備考〕本文は、大きな紙で裏打ちをしてあるので、自然、原本より本は大きくなっている。原本文のたては一六・二cm、よこ一一・六cm。草紙屋九兵衛は、浄瑠璃本の有力な板元である。巻首に小さな朱角印があるが、読めない。

明治四三年購入

本書は、近代の古浄瑠璃研究上、正本発見の上で大きな問題を投げた、同じ装幀を施した一群に入るもので、当館には、同装幀のもので他に『大友のまとり』がある。なお

本書と同名本が天理にあるが、当館本は初板である

たいしよくわん

〈別〉

幸若の詞章で、寛永年間の刊行であろう。なお、当館には奈良絵本もある。

〔形態〕合一冊 袋綴 たて二四cm よこ一七cm

〔表紙〕濃緑色、万字つなぎに蔓草の艶出し模様。改装か〔題簽〕欠〔内題〕第一丁第一行に「たいしよくわん」とある〔尾題〕なし

〔匡郭〕なし。挿絵の面のみ四周单边の匡郭がある。字面高二〇cm、挿絵の匡郭は、たて一八・七cm、よこ一四・五cm（第一図）〔丁数〕五二丁（二六丁欠丁）。丁附は「一」至「五十二終」〔行数〕一〇行〔字数〕一行約一九字〔柱刻〕上部に「大織冠」と柱題、下部に丁附

〔挿絵〕見開きは一図のみ、他は片面。二表・六裏・九表・一三裏・二〇裏・二二表・二五表・三二裏・三六表・四三表・四六裏・四九表・五一表〔筆彩色〕丹・緑・黄・紫。雲はだいたい横線〔本文〕漢字交り平仮名。句読点なし。振仮名あり、濁点なし。挿絵の前頁に空白あり

〔刊記〕なし

〔備考〕本文奥に「以大道寺所藏古写本点句読加朱墨了今古園主人」の墨書と、平出の朱印記がある。昭和二〇年三月購入

つるきのまき

△りー三七▽

〔形態〕 大本 上中下 合一冊 袋綴 たて二六・三 cm
よこ一七・八 cm

〔表紙〕 石畳模様の艶出し 〔題簽〕 上巻表紙、左上にのみある。重郭、題簽題は上下欠損して「つるきのま」とだけ読める 〔内題〕 上巻第二丁第一行に「つるきのまき」とある

〔匡郭〕 三辺単郭。たて一一・二 cm、よこ一六・三 cm。

ただし、挿絵は四周単郭。よこ一六 cm 〔丁数〕 丁附は通し丁。上巻 一八丁（丁附は「一」より「廿二」。挿絵のある丁が「三四」「九」「十四十五」「十七十八」となっている） 中巻 一五丁（丁附は「廿三」より「四十四一」。右と同じく「廿四廿五」「卅卅一」「卅四卅五」「四十四一」とある） 下巻 一八丁（丁附は「四十二」より「六十四終」。右と同じく「四十五四十六」「五十五十一」「五十三五十四」「五十八五十九」「六十一六十二」とあり） 〔行数〕 一面二二行 〔字数〕 一行約二〇字 〔柱刻〕 上部に柱題「つるき」、下部に丁附がある

〔挿絵〕 全部片面、しかも挿絵のある丁のみが、丁附に他と相違が見られるので、この板の前の板木の流用手直しがあると見てよいであろうか。上巻 三表・八表・一二裏
・一四裏 中巻 三裏・七表・一〇裏・一五裏 下巻 四裏・八表・一〇裏・一四表・一六表 〔筆彩色〕 丹・紫・

黄色の三色

〔刊記〕 下巻最終丁裏に「承応式癸巳年初夏開板」と一行に記されている

〔備考〕 明治三二年購入

ときは問答

△WA七一六〇▽

本書は、幸若舞曲の詞章で、古活字丹緑本である。保存はよくない。

〔形態〕 一冊 袋綴 たて二四・六 cm よこ一七 cm

〔表紙〕 黒表紙（万字くづし模様、後補か） 〔題簽〕 欠

〔内題〕 第一丁第一行に「ときわ問答」

〔匡郭〕 なし。挿絵の面のみ四周単辺の匡郭あり。字面高二〇・二 cm。挿絵の匡郭は、たて一九・八 cm、よこ一三・五 cm（第一面） 〔丁数〕 一五丁。丁附は「一」至「十五終」。ただし八丁裏欠 〔行数〕 一〇行 〔字数〕 一行約一九字 〔柱刻〕 上部に「ときわ問答」と柱題、下部に丁附 〔挿絵〕 全部片面 一裏・三表・四裏・一一裏・一五表 〔筆彩色〕 丹緑黄の三色。雲の部分の塗り方は、全部塗るという方法である。八裏は絵であろう 〔本文〕 漢字交り平仮名。振仮名、句読点、濁点なし。挿絵の前頁には、空白を残している

〔刊記〕 なし。ただし、裏表紙見返しに「京四条坊門通敦賀屋久兵衛」と押印されている

〔備考〕敦賀屋久兵衛のこの別押の例は、これまでいくつか見ている。寛永一一年刊の『鬪疑抄』、無刊年の『源平盛衰記』、同『可笑記』『大坂物語』である。これは、敦賀屋の売り本ということであろうか。昭和六年三月購求。なお、当館には、寛永中刊行の同名書を所蔵している。

火おけのさうし

〔京一四八〕

本物語は、板本としては寛永中の板本と寛文六年板松会多入本で、他は奈良絵本が伝えられている。当館蔵本は、寛永中の絵入刊本である。

〔形態〕美濃本 一冊 袋綴 たて二四・一 cm よこ一七・七 cm

〔表紙〕紺青色の表紙で、古い表紙のようであるが、改装であろう。〔題簽〕のちの書題簽「火おけの御」(下欠)とある。屋代弘賢の字と認められる。〔内題〕巻首第一行に「火おけのさうし」とある。〔尾題〕なし。〔匡郭〕なし。挿絵のみ四周単辺。字面一九・六 cm。挿絵の匡郭は、たて一九・四 cm、よこ一三・八 cm。〔丁数〕二六丁。丁附「一」至「廿七」。ただし、二六丁目を「廿七」と誤刻している。〔行数〕一〇行。〔字数〕一行だいたい一八字。〔柱刻〕上部に「ひおけ」、下部に丁附がある。

〔挿絵〕全て片面である。二表・四表・六表・一一表・一三裏・二〇表・二二裏・二五表。〔筆彩色〕丹緑の二種

で、雲などは横に引く線と、山形に描く線とを併用している。〔本文〕文字は漢字極めて少なく、句読点なし。濁点あり。挿絵の前に大きく空白をとっている。和歌は二行書き、一字下げで起し、下句は二字下げとしている。

〔刊記〕なし。〔印記〕第一丁と第一四丁の表右下に「斎田蔵弄」の重郭朱方印がある。当初は、二冊本であったか。第一丁裏に「不忍文庫」、巻首と巻尾に「阿波国文庫」の朱方印記あり。

〔備考〕明治二二年購求

ゆりわか大臣

〔京一八九〕

本書は、幸若の詞章として、寛永中刊古活字丹緑本である。末欠丁。

〔形態〕美濃本 一冊 袋綴 たて二四・五 cm よこ一七 cm

〔表紙〕図書館で施した黒表紙である。〔題簽〕欠。〔内題〕第一丁第一行に「ゆりわか大臣」とある。〔尾題〕なし。〔匡郭〕挿絵にのみありて四周単辺。字面高二〇・八 cm。挿絵の匡郭は、たて一九・二 cm、よこ一四・六 cm。〔丁数〕二二三丁。〔行数〕一〇行。〔字数〕一行だいたい九字。〔柱刻〕上部に「百合若」、下部に丁附。丁附は「一」至「廿三」。

〔挿絵〕見開きはなく、片面ではあるが、挿絵のある頁

に、詞章が割こんでいる個所がある。三裏・六表・一〇表・一四裏・一八表・二一表・二三裏。六表には、匡郭の上に横に詞章あり。一四裏には、一行分、右に詞章あり。二一表では、右に九字分たてに詞章があつて、匡郭はその分だけ後退して、鉤の手になつてゐる。二三裏も、一行分詞章がある。「筆彩色」丹緑黄紫の四色。色は鮮明である。雲などは、各色を横に長く引く手法をとつており、そして、雲全体を塗りつぶすようにしている。「本文」文字は、平仮名多く、漢字に振仮名をふつてある。濁点あり。挿絵の前に空白を設けてある個所もある

〔備考〕印記によると、尾藩野邸氏、屋代弘賢、阿波国文庫と伝来したものであることが判る

〔備考〕明治二十二年購入

奈良絵本

あきみち

△丑一六▽

本書の本文は、岩波の『日本古典文学大系』に収められているが、伝本はこれしかない。しかし、『大和二十四孝』中の「山口秋道」は同内容のものである。本文を比較すると、後者の方はかなり文章に手が入つてゐる。そもそも、

後者の成立については、かなり疑問が持たれてゐるから、異本という意味にはとれないかもしれないと思われる。

〔形態〕横本 合一冊 袋綴 たて一六・五cm よこ二四・五cm 「本文用紙」鳥の子

〔表紙〕緑地に黒の縞模様様の布表紙 「題簽」表紙左上に、空色の短冊題簽に「あきみち 上」とあつて、上を墨で消してある。合冊にしたときに行なわれたのであろう

〔内題〕なし 「寸法」字面たて一四cm よこ一九・四cm

〔丁数〕五二丁。二七丁の表に蔵印記がある。上巻二六丁、下巻二五丁の原の姿であらう 「行数」二二行 「字数」一行一二字前後

〔挿絵〕全部片面である。三裏・七表・一四表・一五裏、一七表・一九裏・二二裏・二五裏・三二表・三三裏・三四裏・三六表・四一表・四五表・四七表・五〇表 「筆彩色」

絵具は黒・白・緑・紺・朱など色は多い。金泥で雲にそつて描いてゐるのは、雲であらうが、形状は明白でない

〔本文〕平仮名多く、句読点、濁点なし。挿絵の前頁には、空白あるいは散らし書きが見られる

〔印記〕上下巻首に「不忍文庫」「阿波国文庫」、巻尾に「阿波国文庫」の朱方印記

〔備考〕明治二十二年購求。

かさしのひめ

△に一一四▽

この室町の物語は、現在、慶応と当館との二奈良絵本の所在が判明しているが、既翻刻の本文とは一致しないので、この二本のほかにも異本があったはずである。

〔形態〕横本 一冊 袋綴 たて一七・三 cm よこ二五・三 cm 〔本文用紙〕薄葉鳥の子

〔表紙〕鳥の子に金泥で野草を描き、銀砂子をまいてある 〔題簽〕表紙中央に、丹朱に金の横線の短冊題簽に「かさしのひめ」と認める 〔内題〕なし 〔寸法〕字面たて一三・六 cm よこ二〇・一 cm 〔丁数〕一五丁 〔行数〕一四行 〔字数〕一行一五字前後

〔挿絵〕片面と見開きと二種あり。三裏四表・七表・八裏・一一裏・一三表・一四表一五表 〔筆彩色〕絵具は黒・白・赤・緑・紺・紫など多色であり、さらに雲の一部を金泥で描いているが、『あきみち』より雲の形は、とっている。一一丁裏の絵は、家屋、雲以外は白描の如くになっているので、未完成のまま貼られたか 〔本文〕句読点、濁点なく、和歌は一字下げ、二行書きではあるが、五・六行にわけ、本文よりさげて記してある。箇所もある。また、挿絵の前の頁、本文を散し書きのようにしてある 〔印記〕「故榊原芳埜納本」の朱長方印記がある

こあつもり

この物語は、絵巻が残っている。それは一の谷の合戦か

△八五五―一八▽

ら物語が始まっているのに対して、お伽草子本は、敦盛の死後から始められている。当館蔵の奈良絵本は、後者の系統である。惜しいことに、下巻のみである。

〔形態〕横本 一冊 袋綴 たて一七・六 cm よこ二三・二 cm 〔本文用紙〕鳥の子

〔表紙〕すれどもとの様子がはつきりしないが、用紙は鳥の子、金粉をまいてあったらしい。見返しは銀砂子。裏表紙は、表紙と同糸の茶色の板本の表紙を転用してある。見返しは残っている 〔題簽〕欠落 〔内題〕なし 〔寸法〕字面高 一三・七 cm よこ二〇・三 cm 〔行数〕一面一五行 〔字数〕一行約一三字 〔丁数〕一五丁。墨付一三丁。前後に遊紙あり

〔挿絵〕全部片面。三裏・五表・七裏・一〇表・一二表・一三裏 〔筆彩色〕絵具は、黒・白・緑・紺・赤・金泥など。金泥で雲になって、金泥で山なりに描いてある 〔本文〕ほとんど平仮名、句読点、濁点なし。挿絵の前頁は、空白あるいは散し書きとなっている 〔備考〕昭和二〇年購求

さころものさうし

△午―三七▽

この物語の伝本は少なくない。写本、板本ともに存しており、本文の異同は、一本ごとに相違していると言つてよい。当館には、奈良絵本と写本と二本を所蔵している。

〔形態〕 大本 上下 合一冊 袋綴 たて三〇・八cm

よこ二一・三cm 〔本文用紙〕 鳥の子

〔表紙〕 上下に雲形黒流し漉きこんだ厚手の鳥の子 〔題簽〕 左上に金色の紙に「さころもさうし上〔下〕」とある。

本文と同筆 〔内題〕 上巻巻首に「さころもの物かたり」とある

〔寸法〕 字面高たて二五・三cm よこ二七・二cm 〔丁数〕

上巻三四丁、下巻一九丁。丁数が、上巻と下巻と非常に異なっている。しかし、上中下三巻であったという根跡もない

〔挿絵〕 片面と見開きと二種ある。上巻 一裏二表・三

裏四表・六裏・一二表・一三裏・一九表・二〇裏・二二裏・二四表・二七表・二九裏・三二表。下巻 一六表。上巻

に多く、下巻がわずか一図というのは、どうも納得がゆかない。挿絵の部分を切り除いたのではあるまいか。丁数の

平均化していないのも、このためであろうか。しかし、折目の糊づけは後半にはあるが、前半には全くない 〔筆彩色〕 絵具は、黒・白・赤・緑・金泥など、雲には金粉をま

いている。画面は、一面全体になく、上下に余白があるのは、書写に使用した底本が横本であったためか 〔本文〕

漢字極めて少なく、濁点、句読点なし。和歌は二行書き、二字下げ。挿絵の前頁に、空白、散らし書きなどは全く見

られない

〔備考〕 明治三十七年購求

三草紙絵巻

△亥一二八△

現在、絵巻仕立になっているが、よく見ると、同じ大きさの横形の奈良絵本を改装幀したものであることがわかる。全四巻、うち二巻が「ふんしやう」で、他は「鉢かづき」と「和田酒盛」とである。

〔形態〕 全四巻 三冊 上下はば一六cm おそらく天地

を裁断しているであろう。貼り続けの箇所は、間隔をしかるべくしたため、原本の横の寸法は推測が難しい。挿絵も天地を切って、体裁を調えている 〔本文用紙〕 鳥の子。ただし「鉢かづき」は間合紙

〔表紙〕 籠中の草花を圖案化した緑色布表紙で、見返しがこまかい布目の金紙で、これは元表装の転用ではあるまいか 〔内題〕 なし

〔寸法〕 字面高八・六cm よこ二〇・三cm 〔行数〕 一面

一三行の冊子であろう 〔字数〕 一行約一五字

〔挿絵〕 「ふんしやう」の第一巻の挿絵は一一図、第二巻

は一三図。「鉢かづき」は一三図。幸若の「和田酒盛」は一三図 〔筆彩色〕 黒・白・丹・赤・薄緑・金泥など 〔本文〕 挿絵の前頁には、空白を置いたらしく、横の寸法が不揃いに短い。また散らし書きもある。「鉢かづき」だけが、

本文異筆である

〔備考〕 明治三十八年購求

たいしょくわん

近世中期の写本である。

〔形態〕 大本 三冊(箱入) 袋綴 たて三三・五cm よこ二四cm 〔本文用紙〕 草花を描いた薄様鳥の子

〔表紙〕 紺に金泥で、松、草花などを描いてある 〔題簽〕 草花などを描いた短冊題簽に「たいしょくわん 上(中・下)」と墨書 〔内題〕 なし

〔寸法〕 字面高二四・三cm よこ一八・五cm 〔丁数〕 上巻二〇丁 中巻二五丁 下巻一八丁 〔行数〕 一面一〇行

〔字数〕 一行約一五、六字

〔挿絵〕 上巻 二裏・六表・八裏・一一表・一六裏・一七表 中巻 五裏・六表・一一表・一九表・二三表 下巻 三裏・七表・一一裏・一二表・一五表・一七裏。絵の構図は板本のそれに近いものが見られる。絵の雲の個所は、金砂子にして、甚だ美麗なる本である 〔本文〕 漢字交り平仮名。挿絵の前の本文は、散らし書きに認めてある

〔備考〕 昭和二年二月購入

玉藻の前

△丑一八▽

本物語には、絵巻、奈良絵本、写本、承応二年板本と、かなり本文は伝わっている。当館には、奈良絵本と写本とがある。

〔形態〕 横本 合一冊 袋綴 たて一六・五cm よこ二二

四cm 〔本文用紙〕 鳥の子

〔表紙〕 厚手の楮紙、表はすべすべしており、くらい黄色無地。見返しは、さや形を押しした銀紙、これは裏表紙にははがされてない 〔題簽〕 中央にあるがすれて「玉もの前」の文字が読みとれる 〔内題〕 なし

〔寸法〕 字面高 たて二一・四cm よこ一九・八cm 〔丁数〕 五四丁。蔵書印によれば上巻二九丁、下巻二五丁である 〔行数〕 一三行 〔字数〕 一行約一二字前後

〔挿絵〕 片面と見開き二種がある。二表・三表・七裏・一二表・一六表・一八表・二四表・二五裏・二九表・三二裏・三四表・四二表・四七裏四八表。下巻の挿絵は少ない 〔筆彩色〕 絵具は、黒・白・赤・緑・紺・金泥など多色である。金泥は雲にそって描かれている。挿絵の前の頁は、やはり空白を置いている 〔本文〕 平仮名多く、句読点、濁点、振仮名なし

〔印記〕 第一丁表に「不忍文庫」「阿波国文庫」、第三〇丁表に「阿波国文庫」、第二丁表に「不忍文庫」、第二九丁裏、最終丁表に「阿波国文庫」の朱方印あり

〔備考〕 明治二二年購求

仁明天皇物語

△丑一七▽

この奈良絵本は、『青葉の笛の物語』の名で通っている物語で、当館には、寛文七年藤井五兵衛板の絵入二冊があ

り、また『扶桑残葉集』巻三にも「青葉物語」として収められているが、本文は後者に近い。古写本が横山重氏にあり、それとも相違がある。寛文板は写本より本文を簡略にしている。

〔形態〕横本 合一冊 袋綴 たて一七・五cm よこ二五・六cm 〔本文用紙〕鳥の子

〔表紙〕厚手の鳥の子に、雷紋と草花とを組み合せた藍刷 〔題簽〕中央の原題簽ははがされ、そのあとに直接に「仁明天皇 下」と墨書し、「横に青葉の笹ト同書ナリ」と記した紙片が貼つてある 〔内題〕なし

〔寸法〕字面高一三・八cm よこ二五・二cm 〔丁数〕二二丁、はじめに遊紙一丁。墨付上下とも一〇丁と原本は推定される 〔行数〕一六行。ただし、一八丁表は一九行

〔字数〕一行約一五字前後

〔挿絵〕片面と見開きとがある。三表・五表・八裏九表・一一裏・一三裏・一七表・一八裏一九表・二〇裏 〔筆彩色〕絵具は、黒・白・赤・緑・紺・金泥などを使用している 〔本文〕挿絵の前頁には、空白があり、また散らし書きをも行なっている。一八丁表の行数の多さは、絵の前に入れるべき本文を、作成の不手際から予定通りに入れられなかったのであろう。本文は平仮名が多い。振仮名、濁点なし

〔印記〕第二丁および二二丁表に「不忍文庫」「阿波国文

庫」の朱方印、一丁裏および終丁裏に「阿波国文庫」の朱方印あり

〔備考〕明治二二年購求

物くさ太郎

△午一六六▽

本物語は、寛永以後たびたび刊行されており、写本も少くない。

〔形態〕横本 二冊 帙入 袋綴 たて一七・八cm よこ二五・四cm

〔表紙〕各巻、表裏異にしてあるが、紺地に松、笹、山野草花などを金泥で描いてある 〔題簽〕左上に「物くさ太郎上(下)」と墨書した短冊題簽がある 〔内題〕「物くさ太郎 上(下)」

〔寸法〕字面高一四・二cm よこ二二・五cm 〔丁数〕上巻一五丁 下巻一七丁 〔行数〕一五行 〔字数〕一行約一三字

〔挿絵〕上巻 三裏・七裏・九裏・一二裏・一五表 下巻 四表・七表・一〇裏・一二裏・一六表 〔筆彩色〕黒・白・緑・赤・茶・金など。本書も、上の雲の下、下の雲の上に、金泥で雲形を描いてある 〔本文〕句読点、濁点なし。漢字極めて少なし。和歌は二行書き、上句は一字下げ、下句はさらに一字下げである。挿絵の前頁は空白、散し書きとなっている

〔備考〕明治三七年購求

その他

伊多矢貝

一卷、模本。彩色は略して、赤黄緑のみ施す。内容は「橋姫物語」。

外題は「伊多矢貝 如慶広通筆 八幡定真」。巻首に「定真」の朱印あり。

奥書は「伊多屋かい之物語／如慶広通筆写／ぬしやはた定（本押）／再主 山名貫業」の四行書き。

東京国立博物館にも絵巻が所蔵されている。慶応義塾大学所蔵の奈良絵本は、また別種のものである。

伊吹とうし

大、一卷、黒漆塗箱入。用紙は厚手鳥の子、草花を描く。雲は金砂子。彩色は濃密。

奥書なし。近世中期写。首に「亀田文庫」の朱印あり。外題、川に菊を描いた朱短冊題簽に「伊吹とうし」と墨書。

昭和一九年三月購入。

梅津長者物語

上下二巻、近世末写、有彩色、奥書なし。

大江山酒天童子絵巻物

大、二巻、絵の部分の切りとって貼ったものであり、詞なし。用紙は鳥の子、雲の部分は金砂子。彩色は濃密。江戸中期写。

鏡男絵巻

一卷、有彩色、近世末写、奥書なし。巻頭に「静屋」の朱方印あり。別朱印は読めず。

喜津祢の草子

小絵巻、模写、彩色、一卷。

絵の最後に「土佐光信朝臣筆」および「如慶広通」「具慶広澄」の二朱印（枠のみ）あり。外題簽、巻首に「内海蔵本」の黒印あり。

奥書、「此本絵者如慶以来先祖代々之宝蔵也／住吉画所」。外題は、「二番／詞飛鳥井殿」

画士佐刑部大輔光信／喜津禰乃草子 全／住吉内記」の四行書き。

西行物語

〔亥〕二二五

大、五卷、近世末写、彩色あり。

奥書は、「右此四卷画図者海田采女佑源相保所筆也 段々文字乃愚翁書写／明応竜集^{庚申} 上陽月中院日／槐下桑門在判」。

十二類巻物

上下二巻、模写、画中の詞以外は省いてある。有彩色。

〈八〇一—一八六〉

本文巻頭に「任之江文庫」の黒印記あり。

外題は「三番

土佐内記広通筆写

十二類巻物二巻之内上(下) 住吉内記

奥書は、「伏見宮初而東武へ御下向之節堅其期而被仰下書置之内撰筆而東之畢 三木新藏人奉

絵段廿四段。寛文初年閏八写筆

右絵巻者二巻

住吉法眼如慶広通筆写

文化十五戊寅二月 住吉内記

酒飯論

小絵巻、模写、一巻。彩色わずか。

奥書「右上戸下戸巻物之絵土佐左近将監光元真筆無異論

者也仍澄之而已

貞享元年孟夏上旬

土佐光昭

絵 光元筆

〈別〉

詞 兼載筆

文化四丁卯年三月

広行

箱書付遣ス

巻首、外題に「内海蔵本」の黒印。

外題は「三番 詞 兼載法師

酒飯論 絵 土佐光元 一

住吉内記

同名の別一巻の模写絵巻もある。

竹とり物語

絵巻、三巻、箱入。近世前期写。用紙は鳥の子。奥書な

し。箱には「竹とり 三巻」と金泥にて書名を記す。

昭和二六年二月購入。

〈別〉

地藏堂草紙

小絵巻、模写、一巻、淡彩、詞なし。巻首、外題に「内

海蔵本」の黒印。

奥書「地藏堂草子写 右兵衛将監光信筆

絵段七段終

はなして、

「寛文四歳大族写 内記慶隆」

外題は、「三番 刑部大輔光信筆

〈別〉

地藏堂草紙 一

住吉内記

文政元年戊寅冬十月十四日
緞山正禎模写
本文には朱訂正多し。

付喪神記

〈別〉

小絵巻、模写、一卷。彩色。奥書なし。内海蔵本、住之

内文庫の墨印あり。

藤袋草子

〈別〉

小絵巻、模写、一卷。淡く、わずか彩色。

外題「三番 刑部大輔光信筆

印記は「内海蔵本」「住之江文庫」の黒印。

付喪神記

一

奥書「慶安二年三月 如慶主」。画中に詞あり。

昭和一二二年七月購入。

住吉内記

外題は「五番入 土佐光信筆
藤袋草子 全 住吉内記」

道成寺絵巻

〈ん一八〉

二巻、模写の奥書なし。近世末写。

破来頓等絵詞

〈ん一八五〉

大、一卷。近世末写。有彩色、具引。奥書なし。

福富双紙

〈ぬ二一四〉

大、一卷。住吉内記所写本の転写本。有彩色。

奥書は「寛政元年三月 日 狩野洞白写

房絵詞」の書名のももある。
徳川黎明会蔵の絵巻は、重文に指定されている。「不留

あさくら・はるひこ 一般参考課主査
ばば・かずお 人文課主査